

三一新書 751

闘う三里塚

朝日ジャーナル編集部 編



闘 う 三 里 塚

定価 350 円

1971 年 7 月 31 日 第 1 版第 1 刷発行

編 者 © 朝日ジャーナル編集部

発 行 者 田 川 敬 吾
1971年

印 刷 所 文栄印刷株式会社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします 三一新書 751

0236-710751-2726

闘 う 三 里 塚

朝日ジャーナル編集部編

三 一 書 房

目次

第一部 土にこめた執念の戦い

土にかじりつく闘魂……………	8
強制代執行令下の緊迫……………	19
三里塚を包囲する“民主ファシズム”……………	37
代執行令下一〇日間の日誌……………	50
三里塚に春がきた……………	57
強制代執行最後の一時間……………	64
持久戦のはじまり……………	71
衰えみせぬ士気……………	80
六月決戦へ……………	86

第二部 執念から闘志への記録

ふてぶてしい反撃の拠点 94

空港の開港遅れる 106

ゲリラに傾いた農民 110

『壊死^{えし}する風景』のなかで（座談会） 118

婦人行動隊員との会話 131

何を滅ぼして空港をつくるのか 135

少年行動隊は私たちに迫る 144

第三部 闘争をつつむ輪

飛行機文明への抵抗 158

篤農家とガードマン 160

力のおごり.....	162
攻撃的ガードマン.....	164
地下壕撤去.....	169
たたかう三里塚の人民天国.....	174
“野ごころ”の旅をおえて.....	192
“英国の三里塚”を訪ねて.....	201
空港は、もう、いらない.....	206
『日本解放戦線・三里塚』.....	214
白骨の怨念.....	218

ただいま土地収用法第102条の2第2項
および行政代執行法の規定により、
成田市駒井野字張沢1119番の9所内の
地にある立木その他一切の物
を伐採・除去作業中です。

一部
土にこめた
執念の戦い



土にかじりつく闘魂——決戦迫る北総台地の熱気

新東京国際空港予定地内の初の強制代執行期間は二月二二日から三週間以内と決定した。三里塚・芝山の反対派の百姓たちは、対象地六カ所に縦横に穴を掘りめぐらし、みずからの生活基盤である土を武器として「死んでも闘う」と決意を固めている。「公共」の名の下に、彼らを「土ぐるみ」おしつぶすことが許されるのか。

緊張の中の余裕

強制代執行を目前に控えた三里塚の台地は、日ごとに緊張を強めている。といっても、そうした外来者の印象は、めっきり数を増してあわただしく行きかう報道陣の車や、昨年、用地内に移された空港公団事務所のものしい警備ぶりによるのかもしれない。

公団事務所から見おろす位置にある強制収用対象地で黙々と、あるいは楽しげに仲間と話しながら穴掘りをしている老若男女の百姓たちの表情には、不思議にとげとげしさはない。彼らにとって、この四年八ヵ月、足かけ六年は「生活即闘争」の連続であり、こうした事態になったからといって、とりたててどうということはないのだろう。

ある天気の良い一日、穴の前に坐って張番をしていたおっさんは、さっきから双眼鏡でこちらをうかがっている公団事務所のガードマンを見上げながら、こう言った。

「ヤツらは工事が遅れてあせるっべえけどよ、オレたちや勤め人じゃねえからクビになるっつうこともねえし、二〇年でも闘いながら食ってけるだからな」

しかし、こうした余裕のうちにも、彼らは四年八ヵ月の経験から闘いの質を確実に深化させている。

そのなかでも、最近とくにめざましい成長ぶりを見せたのは、小、中学生で作っている少年行動隊だ。六七年八月に結成されてからしばらくはあまり実体をとまわなかったが、昨年二月一九、二〇日の第一次強制測量阻止闘争を同盟休校で闘ってから、独自の学習会などを開き、反対同盟でも立派な「戦力」になってきた。そのことを如実に示したのは、ことしに入ってからからの彼らの活動ぶりである。それは「おとなの争いに子どもを利用するのはけしからん」というような「世論」などをからりと吹き飛ばしてあまりあった。むのたけじ氏によれば、「甘ったれた子どもの目でない、人間の目をしている」

彼らは一月から週に一回、成田、芝山はもとより、富里、八街やちまたなど周辺市町村の五〇あまりの小中学校に早朝ビラまきをしている。そうした行動や集会の後には、必ずその日のうちに「総括会議」をする。

二月一日には、穴の前で「少年行動隊大決起集会」が開かれた。子どもたちはこの集会に先生の参加を呼

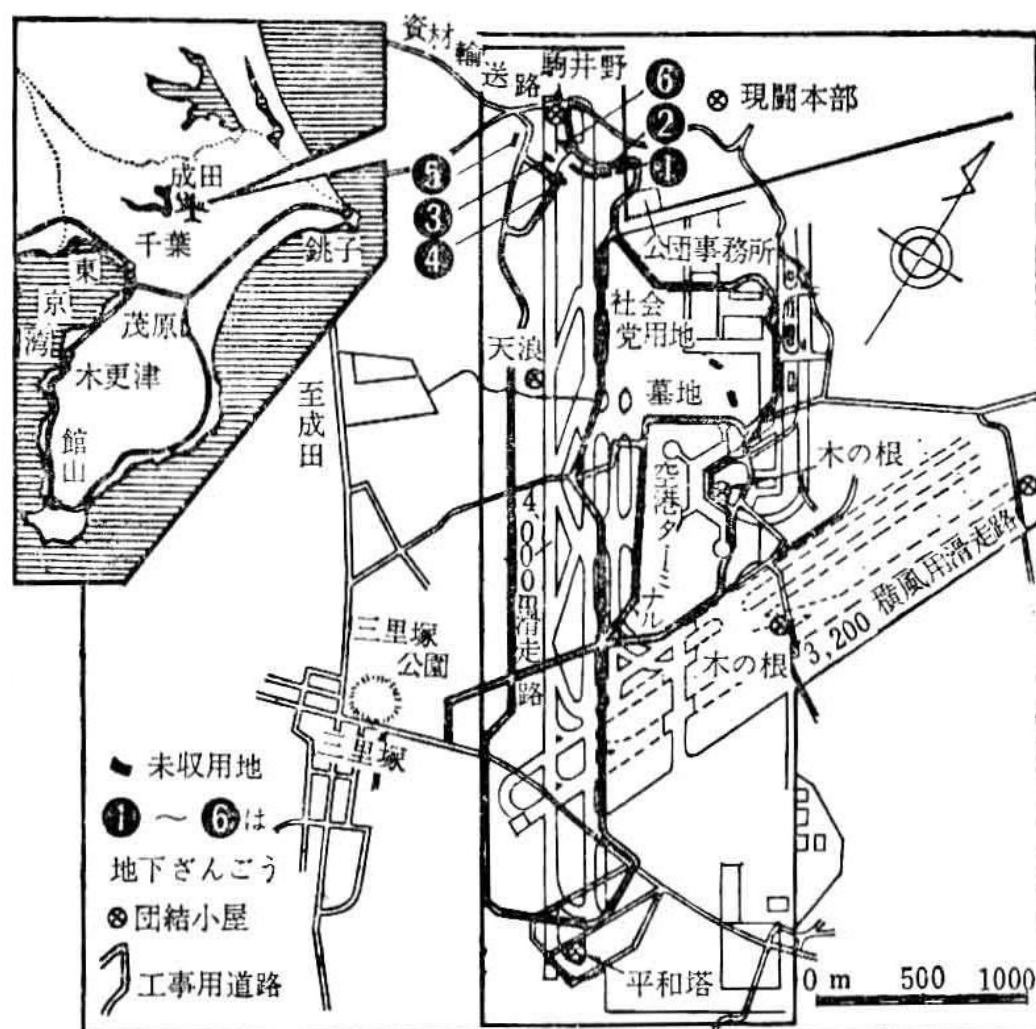
びかけたが、地元の教師は一人も顔を見せなかった。集会後、彼らは初めて自分たちを主体とするデモ隊を組んで公団事務所におしかけた。公団では門にバリケードを作り機動隊がその前に立ちふさがった。一人の小学生が機動隊員になぐられ、顔にケガをして病院に運ばれた。

春一番、少年行動隊

一五日には、おそらく日本の教育史上初めてと思われることが起こった。少年行動隊が中学校を実質的に「制圧」したのだ。この日、少年行動隊約八〇人は、三里塚高校生協議会、東京、神奈川の反戦教師、せんこう隊（先公隊）子どもたちに学習指導している常駐学生）など約三〇人とともに、朝会で空港問題について話し合うため芝山中学校に集まった。この学校は空港ができれば、DC-8型機でも約九〇ホンという騒音に見舞われる場所にある。

しかし、学校側は一方的に朝会を中止してしまった。子どもたちは土砂降りの雨のなかで校庭をデモ行進し、校舎の外から生徒たちに呼びかけたあと、体育館に入って集会を始めた。そのうち四人の反戦教師と一緒に、各部落の少年行動隊代表が校長室に行き、校長、教頭と話し合いをした。しかし、子どもたちの追及の前に、校長、教頭はときにむき出しの敵意をみせながらも、ほとんどともに答えることができない。校長の机の上に積まれた名刺の束の一番上に「成東警察署警備主任巡査部長吉原和夫」とあった。

この話し合いは二時間以上つづいたが、まったくちががかないうちに、体育館で待機していた子どもたちがしびれをきらして再びデモを始め、そのまま校舎内に入りこんだ。同時に放送室を占拠し、「こちらは少年行



動隊放送局です」と校長室での話合いの内容を暴露した。そして二階、三階とデモをしながら分散して各教室に入り、クラス討論の呼びかけ。授業中の教師たちは、「今日の授業はこれで終わります、礼ッ」と言ってそそくさと教員控室に逃げ込んでしまった。少年行動隊のなかでも芝山中の女生徒などは、泣きながら一対一

で級友に訴える。訴えられたほうも泣きじゃくるばかり。いっぽう教師がまったくなくなった職員室では、少年行動隊とともに、その数を上回るほどの同校の男生徒たちが、「空港粉碎」、「収用阻止」、「先公起て」など落書のしほうだい。芝山中はまさに「チビッ子解放区」の観を呈した。クラスオルグが一わたり済んだところで、校内放送が「全校討論集会」の呼びかけを流した。授業のなくなった生徒たちはそろそろと体育館に向かい、四六七人の同校生徒のうち約三〇〇人が集まった。

「いっしょに闘って」

その場に校長、教頭が引っぱり出された。「先生は防音校舎に入りたいですか」、「わたしたちが長期の同盟休校に入ったらどうしますか」などと質問が浴びせられる。

これに対して校長は、「同盟休校はできればやめたほうがよいが、現状ではやむを得ない、あえて止めはしない。防音校舎はこまったものだ」と答える。「だったらなぜぼくたちと一緒に闘わないのですか」と追いかける。「空港ができてしまえばしょうがない。公務員として君たちと一緒にやることはできない。中立を守る」と繰り返す。「いまの段階で黙っているということは政府や公団に味方することになる。ぼくたちが命がけで闘っているのに、先生がたはクビになるのがこわいんですか」と少年行動隊。芝山中の生徒も半数ほどが拍手を送る。学校側はまったく対応できず、このあたり、初期の全共闘運動とそっくりである。

昼食の休憩をはさんで、午後も討論集会を再開、四時前から意気揚々と校外の無届けデモに移った。「見物」に来ていた青年行動隊員も「ガキらやるなあ、おれたちはカタなしたよ」と苦笑い。

この日の経過は千葉県教育界に深刻な波紋を投げかけた。県教委は学校側のとった態度に不満の色をみせ、機動隊を導入しても強い姿勢で排除することを望んでいたという（二月一六日付『朝日新聞』千葉版）。いやはや。

こうした子どもたちの闘いに、親たちは口々にいう。「ガキらがこんなに真剣にやっているのに、いい加減なところで妥協したでは『親子の断絶』どころではすまされねえ」。反対同盟が長い間唱えてきた「家族総ぐるみの闘い」がより一層結実したといえよう。

テント張りの野戦病院

反対同盟が支援学生らとともに家族ぐるみで地下塹壕を掘り進めている六カ所の今回の強制代執行予定地は、

四千メートル滑走路を含む第一期工事区域の北端にあたる。面積にして約一五〇〇平方メートル、第一期工事区域の総面積約五五〇ヘクタールからみれば、まったく針でついた点のようなものだ。しかし、同盟はここを一坪運動用地として権利を分割し、土地所有者関係人は一一一人にのぼる。第一期工事区域内には、他に三つの団結小屋や一坪運動用地、墓地など計約三・六ヘクタールの強制収用対象地があるが、空港公団はこの六カ所について千葉県収用委員会に対し「土地収用法」に基づく収用裁決を申請、収用委はこれを受けて「公開審理」を開こうとしたが、五回とも反対同盟に「粉碎」され、実質的な審理はほとんどなされないままに、一月二六日裁決を出した。

公団がこの六カ所をとくに急いで申請したのは、それだけ工事に時間がかかるからだ。一カ所を除いては高さ一〇〜二〇メートルほどの斜面の雑木林、その下は谷地やちだ田と呼ばれるこの地方特有の低湿地で、もともとは田んぼだったところだ。それだけに地盤がゆるく、埋立て、舗装などの工事はどんなに急いでも七カ月はかかるといわれる。

それだけに強制代執行を阻止しようとする同盟の側の決意はなみなみならぬものがある。

そうした決意の一つの現れが、二月一四日、駒井野団結小屋の隣に作られた野戦病院だ。縦一〇メートル、横八メートルの大テントを使った立派なもので、青医連のメンバーが治療団としてかけつけるという。長い三里塚闘争でも野戦病院が作られるのは初めてだ。テント張りの作業をしていた東峰部落の石井武さんはこう言っていた。

「それだけこっちも危険性があるつつうことをみてるわけだよ。いままでの闘争はよ、強制測量だなんだと言ったって、むこうは適当なところで三七条（収用法の条文。航空測量など他の手段によるもの）に切り替える

なんつうこともできたけど、今度はそうはいかねえからな。むこうもやるべきことは一度はやんなきゃなんねえつうことだよ。こっちとしてはいまは穴にもぐるのが一番良い戦法だな。いくら権利が移った（二月一日から法律上は公団の土地になった）って言ってもよ、オレたちはだれもカネ受け取ったわけでねえし、テメエたちの土地にテメエたちで穴掘って入るんだからだれも文句はあるめえよ」

食料、井戸、排水も

このあたりは関東ローム層の赤土地帯で、地質は非常にもろい。警察側は再三「穴に入るのは自殺行為だ」と警告を出している。これに対して「土をいじって生活しているだからな、机の上で計算するよりもどこを掘ったら危険かは百姓が一番よく知っているよ。丸太で補強もしてあるし、機動隊が上で暴れなきゃつぶれはしねえ」と穴掘りの百姓たち。

これらの穴は第六地点の縦穴を除いて、あとは斜面を利用した横穴。それぞれの穴が奥でつながりあい、網の目のようになっていくという。中には食料も十分貯蔵しており、地下井戸もあるし、空気の悪いところには送風機で送っていて、長期戦の備えは万全だそうだ。

各地点には新しく小屋が建てられ、同盟員や学生はここでも寝泊りしている。第二地点わきの小屋は、ワラぶきで三畳ほどの広さ。「おがみ」と呼ばれるもので、戦後この地方に開拓に入った人々が、当時住んでいた形だそうだ。第六地点では、縦穴の上に鉄骨とトタン板で本格的なカマボコ型の屋根が作られている。一つだけ離れた場所にある第五地点では、四方を工事で埋めつくされ、そこだけポツカリとくぼ地になっている。こ

この小屋は高さ五メートルほどのところに、何本かの立木にかけて作られている。また大きな松の木の高さ一五メートルほどの枝には、しっかりした足場ができている。

ある穴では中にたまった水を、松の小枝を並べて埋めこみ、ここへしみこませて排水するなど、これらの地下塹壕はまさに、土に生きる農民の知恵を結集したものといえよう。

こうした農民の闘う心を支えているものの一つに、去る一月一日、心筋梗塞で亡くなった小川明治反対同盟副委員長の遺志がある。「家の大黒柱に体をしぼりつけても動かねえ」と口ぐせのように言っていた明治さんは、穴掘り戦術を強く主張した一人でもあった。彼はいま遺言どおりに、空港予定地のど真中、天浪共同墓地に土葬されている。荒れはてた墓地の中でひととき新しい明治さんの墓標には、生前闘いの先頭に立つとき、いつもかぶっていた緑色のヘルメットがかぶせてあった。人の形に盛られた土の下から明治さんの執念がいまでも伝わってくるようだ。

うつろな「国家的要請」

墓地のまわりはブルドーザーに醜く削り取られている。奥さんの得子さんは「三月二日が四十九日だというのに、お墓へ行く道までなくしてしまって、まったく人間のやることじゃねえよ」と怒りをもらしていた。権力によって生得の表情を奪われた赤茶けた土に囲まれて、この墓地だけはたしかな相貌を持ちつづけている。

このような百姓たちの抵抗の前に、強制代執行の責任者である友納千葉県知事は、何とか延期したいと考えていたようだ。それには、四月の知事選挙の思惑がからんでいる。その前に手荒なことをして、もし死者でも